

# 朝日庄内の風

令和 8 年 3 月 19 日 第 36 号  
朝日庄内森林生態系保全センター

## CONTENTS

- ドイツトウヒのツリーづくり ..... 3  
かんじき雪歩き体験 ..... 4  
朝日山地の中・大型哺乳類調査結果 ..... 5  
コラム：イヌワシ・クマタカの見分け方 .. 7



カワウの死体を取り合うノスリ  
2025.1.13 鶴岡市 都沢湿地 (撮影:有本 実)

## 所長の独り言

朝日庄内森林生態系保全センター所長 岩間 由文

令和7年度を振り返ってみますと、夏の猛暑とクマの大量出没が印象に残ります。小職としても朝日山地とその天然林・広葉樹林との関係を考えさせられた年でした。

朝日山地では平成15年から『特別モニタリング』として、溪流を含めた森林のモニタリング調査を行ってきました。東北森林管理局ではこれまで、ブナを中心とした豊かな天然林を有する朝日山地森林生態系保護地域内に、5つの調査箇所を設定し、直径や樹高、また地表の草本等の種類を定期的に調査してきました。

天然林の調査箇所は、場所や林齢（全て広葉樹を中心とした160年生以上の高齢木）によって差はあるものの、10年間の期間において、1箇所を除いて一定の成長が確認されました。一部の箇所では人工林相当の大きな成長量が確認されました。今後の精査・確認作業が必要ではありますが、小職が思っていた以上に高齢級の広葉樹が成長していたことに驚いた次第です。

以上、調査の一部をご紹介しましたが、これまでの調査結果については、今後、局内で取りまとめを行いたいと考えています。

また、朝日山地森林生態系保護地域は、その管理計画で『針広混交林化を図るため必要な施業を行い、将来は天然林に導くこと』とされています。これまでに人工林から天然林への誘導手法について調査報告書が作成されてきたほか、平成24年に列状間伐したスギ林で、天然林誘導の現地検討会を開催しています。検討会から概ね10年を経て、現地を見る機会を得ました。間伐箇所周辺や搬出路跡には、思いのほか広葉樹が侵入し、場所によっては本来の植生であったと思われるブナも生育していました。搬出を伴う間伐は、地形が変わったり、水が濁るなど一定の攪乱が生じますが、概ね10年の期間で見ると、外から飛来したり、土に埋まっていた種子の発芽による広葉樹や、上木等に被圧されていた幼稚樹が、伐採をきっかけに成長することをあらためて感じた次第です。

話は変わりますが、朝日自然塾の連絡協議会を今年度から書面による開催とさせていただきました。

この協議会は森林生態系保護地域管理委員会（当時）の構成団体を中心に、体験活動型森林環境教育イベントを実施してきたものです。当センターの森林保全管理へのシフト、コロナ禍そして時の経過による参加者又は参加団体が減少してきた中、活動やイベントを見直しさせていただきました。地域の方をはじめ多くの方に支えられ、これまでに延べ1,700人以上の方に参加いただきました。この場をお借りして、これまで携わってこられた皆様に御礼申し上げます。

一方で、今後も地域から望まれる森林環境教育に携わってまいりたいと考えておりますので、引き続きよろしく願いいたします。



搬出路跡に侵入した広葉樹



間伐したスギ林の下層に生育するブナ

## 西荒瀬保育園 ドイツウヒのツリーづくり

11月27日、『みどりの保育園推進事業』の一環として、西荒瀬保育園の皆さんと、『ドイツウヒ』という松ぼっくりを用いたツリーづくりを行いました。園児たちに身近なクロマツのものとは異なり、大きく見ごたえのある松ぼっくりです。はじめにセンター職員から松ぼっくりのお話をして、ドイツウヒとクロマツの松ぼっくりを比べたり、種を飛ばしたりしました。ドイツウヒ、大人でも聞き慣れない名前ですが、覚えてくれたようです。松ぼっくりにまつわるクイズを出題すると、元気いっぱいの声で答えてくれました。

その後は各自好きなツリーを選び、モールやビーズで飾りつけをすると、あっという間に完成し、次々に作品を見せに来てくれました。どれもキラキラと華やかで、てっぺんには大きなお星様がついていました。

西荒瀬保育園の皆さんとの活動は今回で年度内最後となります。5月のクロマツ探検隊では2番まで聞かせてくれた『クロマツの



園児たちは大きな声で「リス！」大正解でした



クロマツの種をとばしてみると・・・クルクルとプロペラのように落ちていきました

歌』を、今回は3番までしっかり歌うことができていました。もうすぐ一年生。子供の頃に記憶したことは、反芻し懐かしむうちに大切な思い出となり、大人になった自分の心を支えてくれていることがあります。大きくなっても、クロマツの森で遊んだこの思い出が心の片隅で光り、豊かな感性を育む一助となることを願っています。(玉川)



迷いなく飾りつけしていきます



自慢の作品をお披露目してくれました。とっても上手にできていました！



## 朝日自然塾 かんじき雪歩き体験

2月14日、湯殿山スキー場で開催された『月山あさひ雪まつり』において、当センターでは『令和7年度朝日自然塾プログラム』に基づき、《かんじき雪歩き体験》を実施しました。つい先週まで、数年に一度といわれる冬将軍が居座り、積雪は右肩上がりに増えていましたが、当日は思いがけないほどの陽気に。

10時の開始間もなく、ゲストとしてお迎えした方言マルチタレントのナマリーポートマンさんが体験に参加。かんじきを履いて雪上を歩く驚きや楽しさを、庄内弁のやわらかい響きとともに元気に発信してくださいました。その後も、この日のために村山市から来てくれた若い方をはじめ、ふらりと立ち寄ったスキーヤーなどが、次々と体験していききました。

昨年度までは、リフトで中腹まで上がり、森林内を歩きながらブナの実や動物の足跡を観察する約1時間の自然観察プログラムでした。しかし、参加までのハードルの高さもあり、参加者は減少傾向に。そこで本年度からは、かんじきの装着と周辺の雪上歩行のみを楽しめる、約10分で体験できる内容へと大幅に見直しました。その結果、多くの方に気軽にかんじきを体験していただくことができました。

かんじきは、縄文時代から使われてきたとされる知恵の道具で、雪の上で沈みにくくするために足裏の面積を広げたシンプルな構造が特徴です。地域ごとに結び方が異なるなど、長い歴史と文化が感じられます。かつて雪国では生活に欠かせないものでしたが、生活様式の変化により、近年は一般の人が目にする機会も減りました。今では職人の引退により伝統が途絶えかけている地域もありますが、それでも雪山で働く人々にとっては、今なお欠かせない存在です。今回の体験を通じて、参加者の皆さまに、かんじきの奥深い魅力を感じていただけたなら幸いです。(安部)



庄内美人のナマリーポートマンさん、会場中を盛り上げてくださいました！



残雪から顔を出したフキノトウ



結び方は意外と簡単、長靴にも装着できます



試しに斜面を下りてみると・・・あ、沈まない！と歓声があがりました

## 朝日山地の中・大型哺乳類調査結果

本誌第34号でお伝えしていました中・大型哺乳類調査(カメラトラップ)ですが、11月中にセンサーカメラを全て撤収し、画像の同定作業も終了しました。調査内容の詳細は当センターWebサイトに報告書を掲載しましたので、興味のある方はそちらをご覧ください。ここでは調査にまつわるエピソードや調査結果等について、撮影された動物の画像を交えながら簡潔にご紹介します。

### …色々ありました…

6～11月の約5ヶ月間に渡り、朝日山地周辺の計10箇所に1台ずつセンサーカメラを設置しました。あとは放置すればカメラが勝手に撮影してくれるから楽だろう、と思われがちですが、そうは問屋が卸さないのが悩ましいところです。私の経験上、誤作動が多発して電池が無くなったり、大型哺乳類(ヒトも!)にカメラの向きを変えられたり…と様々な問題が発生するので、月に1度は点検に行かざるを得ないのです。以前、白神山地周辺でセンサーカメラを設置した時には、画角内の植物が生長していく様子が延々と連続撮影されていて、愕然としたことがあります。

今回新たに生じた問題は、1箇所でカメラが水没!したことです。34号p.6に掲載した池の畔のカメラが、9月の豪雨で池の水位が大幅に上昇して、9月11日に現地を訪れた際には写真①の有様でした。参ったな…と後日水が引いてからカメラを回収し、一縷の望みをかけて1週間程乾燥

させてからカメラの電源を入ると、何と起動するではありませんか!生活防水仕様でしたが、侮れないものです。挿入していたSDカードには、レンズぎりぎりまで水面が迫ったカメラに止まろうとする?鳥類の画像が保存されていました②。何はともあれ、来年度は設置箇所を移さなくては。

9月の豪雨の影響は、他のカメラ設置箇所にも及びました。2箇所のカメラに向かう道路が崩壊してしまい、データ回収に1時間程度の歩行を余儀なくされたのです③④。地球沸騰化によるものでしょうか、近年は『100年に1度』と形容される豪雨災害が、毎年日本のどこかで発生しているように感じます。毎年継続するモニタリング調査は、毎年安全に辿り着ける場所に調査地を選定することが重要ですので、この2箇所についても、来年は設置箇所を見直す予定です。



## 調査結果

右の表は、今回の調査で撮影された動物の撮影回数をまとめたもので、計 10 箇所のデータを合計した値です。参考記録として鳥類についても集計し、哺乳類・鳥類ともに不明種は種数に含めていません。

調査の結果、哺乳類は合計 12 種 266 回、鳥類は合計 3 種 26 回、合わせて 15 種 292 回撮影されました。最も多く撮影されたのはアカギツネ(99 回)で、次いでタヌキ(46 回)、ニホンザル(32 回)、ツキノワグマ(20 回)、ニホンカモシカ(18 回)…と続きました。外来種のハクビシンは 7 回、山形県内で農業被害が年々増加しているイノシシが 8 回、今のところ被害が見られないニホンジカは雄のみ 4 回撮影されました。

「ん？撮影“頭数”ではなくて“回数”？」と疑問に思われるかもしれませんが、例えばタヌキが同じカメラで何度も撮影された場合、それが同じ個体なのか別個体なのか、画像からは識別できません。“頭数”では同一個体を重複して数えている疑念が生じるため、撮影“回数”としています。ただし、同じ画角内に複数頭が撮影された場合は、その頭数分を撮影回数として数えています。

また、この表中に『アカギツネ』という種名がありますが、これもまた「ん？キツネと何が違うのか？」と疑問に思われるかもしれません。これはキツネそのものなのですが、図鑑によって『キツネ』『ホンドギツネ』など表記がまちまちなのです。これはキツネに限ったことではありません。報告書でどの名称を使うべきか検討しましたが、日本哺乳類学会が公開している『世界哺乳類標準和名リスト 2021 年版』に記載された和名で統一することにしました。

種名	合計
ニホンザル	32
ニホンリス	3
ニホンノウサギ	13
ハクビシン	7
タヌキ	46
アカギツネ	99
ツキノワグマ	20
アナグマ	10
ニホンイタチ	2
イノシシ	8
ニホンジカ	4
ニホンカモシカ	18
不明コウモリ類	1
不明哺乳類	3
哺乳類 撮影回数合計	266
哺乳類 種数合計	12
ヤマドリ	21
カケス	3
トラツグミ	1
不明鳥類	1
鳥類 撮影回数合計	26
鳥類 種数合計	3
全撮影回数合計	292
全種数合計	15

### 撮影回数が多かった上位 3 種



母親を追いかけるニホンカモシカの子供が連写されました！(8月)



## カメラトラップの重要性

カメラトラップは長期間継続することによって得られる情報量が多く、調査地域の保全に繋げる基礎となるデータが蓄積されます。例えば今後ハクビシンが増加して、食性が被るタヌキが減少するかもしれません。駆除が進められているイノシシが減少し、逆にニホンジカは増加するかもしれません。近年人身被害が多発しているツキノワグマの動向にも注視すべきですし、イヌワシやクマタカの餌として重要なニホンノウサギやヤマドリの増減にも留意すべきでしょう。

健康診断に例えると、ニホンジカに特化したボイストラップはバリウム検査、あらゆる動物を撮影するカメラトラップは血液検査、といったところでしょうか。来年度以降も毎年定期健診を継続して、朝日山地の健康管理に役立つデータを取り続けていく予定です。(有本)



外来種のハクビシン



親子で撮影されたイノシシ



雄のニホンジカ成獣



ツキノワグマの成獣



兎跳びするニホンノウサギ



雄のヤマドリ成鳥

## コラム イヌワシ・クマタカの見分け方 (文・撮影:有本 実)

野生動植物や茸の観察と撮影をライフワークにしている私は、フィールドに出るとしょっちゅう空を見上げています。イヌワシやクマタカに会えないかと目を凝らすのですが、朝日山地と月山ではトビがやたら多いことに驚かされます。右下の写真は朝日山地好きにはお馴染み、小障子から撮影した障子ヶ岳の大岩壁で、いかにもイヌワシが営巣しそうな雰囲気満載ですが、この上空を優雅に飛翔していたのはトビでした。トビに罪はありませんが、トビかよ…と少しガッカリです。

登山客に人気の弥陀ヶ原～月山～姥ヶ岳の月山神社参詣道一帯も、イヌワシの狩場に適した広大な草地が広がっていますが、ここで私が見つけた猛禽類はほとんどトビで、ごく稀にノスリとハイタカを確認した程度です。かなり低空をトビが飛ぶので、よく登山客から「あれ、イヌワシじゃない!？」と歓声が上がりますが、ガッカリさせないように、(いや、あの、トビです…)と心の中で呟いていました。



この大岩壁の上空を飛翔していた猛禽類は…

森林生態系の頂点に君臨するイヌワシ・クマタカの勇姿を一目見たい、と願う方も多いと思いますが、もしかしたら気付かずに見過ごしていたかもしれません。図鑑には体長や羽の色などが細かく記載されていますが、現場では遠くの空を飛ぶ豆粒のような姿を見つけるのが精一杯でしょう。そんな状況でどのようにイヌワシ・クマタカを見分けるのか、私なりのコツを簡単にご紹介します。

それは、体長や色などの細かい情報は諦めて、『形』と『羽ばたき方』で識別するのです。まずはトビとノスリの2種について、形と羽ばたき方を脳裏に焼き付けます。この2種は人里から奥山まで至る所に生息していますが、特に秋～春に田畑周辺でよく見られるので、夏山シーズン前に近所でじっくり観察して完全に覚えましょう。トビは尾羽が三角形で翼の先が垂れる印象、ノスリは尾羽が扇形でポッチャリ体型、どちらもワッサワッサとゆったり羽ばたきます。それに対してイヌワシは翼の前後が並行で横長のグライダーのような形、クマタカは翼が幅広で後端が大きく膨らむ“やっこ凧”のような形で、どちらもゆったりした羽ばたきと旋回を繰り返します。インターネットの動画サイトに掲載されている、各種猛禽類の飛翔動画を視聴するのもおすすめです。

山奥でパタパタ忙しく羽ばたく猛禽類は主にハイタカやハヤブサなので除外して、ゆったり優雅に羽ばたいていたら、トビかノスリかを見極めましょう。どちらでもない、となると、夏季にはハチクマが紛らわしいですが、イヌワシかクマタカの可能性が一気に高まります。是非見たいという方、今シーズンはトビとノスリを覚えてから、登山中には足元に気をつけつつ、空を見上げてみましょう！

### 【トビ】

尾羽が三角形の猛禽はトビのみ。ピーヒョロロ…という鳴声も参考に。



2026.2.22 山形県鶴岡市

### 【ノスリ】

ネズミ類が主食のため農耕地に多い。体の割りに頭が大きくかわいい印象。



2025.12.29 愛知県瀬戸市

### 【イヌワシ】

開けた草原で狩りをするのに適した横長の翼



2021.11.28 秋田県山本郡

### 【クマタカ】

林内で小回りを利かせて狩りをするのに適した幅広の翼



2016.2.28 青森県西津軽郡



発行：林野庁 東北森林管理局 朝日庄内森林生態系保全センター

〒997-0015 山形県鶴岡市末広町 23-37 TEL: 0235-26-1841

<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/syo/asahi/>

